

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 11 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02411

研究課題名(和文) 両大戦間期ドイツ児童文学における都市ベルリンの表象についての研究

研究課題名(英文) A study of Berlin in the German children's and youth literature during the interwar period

研究代表者

佐藤 文彦 (Sato, Fumihiko)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：30452098

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではベルリンを舞台にした両大戦間期ドイツ児童文学をもとに、モダン都市ベルリンと子どもの関係性について考察した。その結果、新聞や電話で情報を収集・伝達し、さまざまな交通手段を駆使して巧みに都市を移動する新しい子どもの姿は、19世紀までの児童文学の人物とは決定的に異なるだけでなく、大都会に疎外される近代人を描いた同時代の大人の文学とも一線を画することがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study analyses the relationship between children and the modern city of Berlin based on the German children's and youth literature during the interwar period. Consequently, it was proven that a new type of children arose in the 20th century, which gathers and transmits information through newspapers and telephones and cleverly moves through the city by using different means of public transport. On the one hand this new type of children differs widely from the children of the 19th century and on the other hand from the characters in the contemporary German adult literature, who feel alienated by the urban life in this big city.

研究分野：近現代ドイツ・オーストリア文学

キーワード：ドイツ文学 児童文学 ベルリン 両大戦間期

1. 研究開始当初の背景

1933年から45年にかけてのいわゆる亡命ドイツ文学に関する研究は、ドイツ国立図書館が継続的に文献を収集するなど、ドイツ本国においてはかなりの蓄積が見られる。その一方で相当数の亡命作家たちが亡命前に取り組んでいた彼らの初期の文学活動、とりわけ1920年代から30年代前半にかけての児童文学への関心は、エーリヒ・ケストナー(Erich Kästner, 1899-1974)を除き今日、研究が端緒についたばかりであるのが実情である。

そういったなか、近年の大きな成果のひとつとして挙げられるのが、2012年にビーレフェルト大学名誉教授のNorbert Hopsterらが中心となって刊行した*Die Kinder- und Jugendliteratur in der Zeit der Weimarer Republik*である。26の論者から成るこの論集では、ワイマール共和国期の児童文学について、社会主義的なもの、ユダヤ系のもの、植民地主義に彩られたもの、当時の新興メディア(ラジオや映画)との関係が強いものなど、さまざまな観点からのアプローチが展開された。しかしこれら20世紀ドイツ児童文学に関する最新かつ多様な取り組みに対するわが国のドイツ文学研究者たちの反応はすこぶる鈍い。他方、この時代・このジャンルの代表的作家ケストナーへのわが国の研究者および読者層の関心の高さは、今世紀に入って以降も一向に色褪せることはない。

本研究はわが国における活発なケストナー研究の意義を認めつつも、ケストナーひとりへと関心が偏ることで、ドイツ語圏で広まりつつある多元的な両大戦間期ドイツ児童文学研究に逆行しかねない、わが国の研究状況への危機感から出発したものである。あるいは視点をより大きく、ドイツ本国における研究動向の中に位置付けるならば、研究代表者は1999年にGudrun Wilckeが*Vergessene Schriftsteller der Erich-Kästner Generation*を通じて行った、ケストナーの陰に隠れ、忘れられてしまっていた児童文学者たちの発掘作業に以前から注目していた。さらにこのWilckeが前世紀末に蒔いた種が、今世紀に入りHopsterらの手によって、ワイマール共和国期のドイツ児童文学を包括的に理解しようとする動きとして花開きつつあることもまた高く評価していた。本研究課題はこういった研究動向を背景に、その流れに沿って展開されることを目指したものである。

2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、両大戦間期ドイツの児童文学に描かれた同時代のベルリンの子どもを取り巻く生活・社会環境について、その実態を解明することにある。具体的には、ワイマール共和国期の大人の社会に特徴的な傾向(戦争孤児あるいは母子家庭の増加、プロレタリア革命運動の隆盛、交通網の整備、少数民族(ジプシー)差別、外貨(米ドル)の流入、広告産業の成長など)が子どもの生

活や社会に及ぼした影響について、当時の児童文学はどう描いたのか、そしてそれを読む子供たちにどういった視点を提供しようとしたのか、個々の作品分析を通じて明らかにすることを目指した。そのことによって、次世代の視座からモダン都市の光と闇の部分を記述するという、20世紀の都市型児童文学が担った新たな側面の解析を試みた。

以上のような研究目的を掲げた背景には、両大戦間期ドイツ児童文学はベルリンを舞台にした作品が圧倒的に多いという事実が存在する。研究代表者はこれまで1920年代から30年代にかけてのプロレタリア革命童話や、その流れをくむ(ベルリンを舞台にした)社会主義児童文学を研究してきたが、こういった政治的スタンスとは対照的な、商業的な出版社からもまた、多くのベルリン児童文学が出版されている事実にも注視してきた。その代表的な作品がケストナーの『エミールと探偵たち』(1929)や『点子ちゃんとアントン』(1931)であるのだが、研究代表者はこれらの作品だけでなく、ケストナーの陰に隠れたいわゆる「ケストナー世代」(Wilcke)の他の作家たちが描いたベルリンをも併せて俎上に載せることで、ベルリンという20世紀の新興の大都市を児童文学はどう描いたのか、それ以前の自然を背景にした伝統的な児童文学からどういった変貌を遂げたのか、両大戦間期ベルリン児童文学を社会的歴史的な流れの中に位置付けて理解することを試みた。作家や作品によって異なるさまざまなベルリン描写を追跡することで、20世紀の都市型児童文学の諸相を多面的に把握することができるのではという仮説に基づき、上記の目的を掲げた。

3. 研究の方法

文献学に基づいた作家・作品研究であるため、主たる方法としてはテキストを読み込む内在解釈を採用した。しかしケストナーの作品(一次文献)を除き、両大戦間期ベルリン児童文学を体系的に所蔵する機関が国内には存在しないため、研究の予備的作業として、資料の体系的および集中的な収集とその整理に取り組んだ。具体的には、「ケストナー世代」に属しながら、わが国ではこれまで注目されてこなかった作家、ヴォルフ・ドゥリアン(Wolf Durian, 1892-1969)、アレックス・ウェディング(Alex Wedding, 1905-1966)、タミ・エルフケン(Tami Oelfken, 1888-1957)、野原駒吉(Komakichi Nohara, 1899-1950)らの作品(一次文献)、モダン都市ベルリンの「黄金の20年代」に関する研究書・研究論文、両大戦間期ベルリンの児童文学出版状況や都市史に関する研究書・研究論文について、とりわけ精力的に収集した。

収集・整理された一次文献については、当然のことながら精読および分析(テキスト内在解釈)を行った。ただし、文学作品の中の子どもの視点を通した都市ベルリン表象の

再構築を目指す本研究においては、社会学や地理学における都市研究の成果もまた積極的に援用された。研究開始当初は想定していなかったが、心理学者の Martha Muchow が 1920 年代末に発表した *Der Lebensraum des Großstadtkindes* は、必ずしもベルリンの子どもに特化した研究ではないものの、同時代のドイツ語圏の大都市に生きた子どもの生態調査報告として大いに役立った。また、Michael Bienert の *Kästners Berlin* (2014) は、ケストナー作品に描かれたベルリンの痕跡を現実の(現在の)ベルリンにたどったものであるが、ケストナーと同時代の他の作家・作品をも考察対象とする本研究にとって、作品分析を行う際はもちろん、実際にベルリンに赴いて現地調査を行う上でも貴重な視座を与えた。加えて 1930 年前後のベルリンの古地図や路面電車・地下鉄・バスの路線図もまた、本研究においては一次文献同様、大いに活用された。

4. 研究成果

本研究によって得られた最大の成果は、これまでわが国のドイツ文学・児童文学研究において省みられることのなかったケストナー世代の複数の作家の作品を並列させて論じることで、両大戦間期ベルリンの子ども像を立体的に復元することができた点にある。とりわけ各作品に描かれた子どものベルリン市内の移動について、様々なあり方を指摘することができた。以下、その点について概観する。

(1) 馬車鉄道しか知らないドレスデン出身の少年(エーミール)が列車でベルリンに足を踏み入れるところから始まるケストナー『エーミールと探偵たち』(1929)において、子どもが移動するために使う交通手段は路面電車・地下鉄・バス・タクシー・自転車と多岐にわたる。彼らの活動空間はおもにベルリン西部とされているが、その際に子どもたちの活動拠点が新興の西側地区に住む住人を当て込んで作られた豪華な映画館のそばに定められたのは象徴的と言える。なぜならそこは両大戦間期に発展しつつあった新しいベルリンを代表する都市空間であり、伝統的な中心部あるいは東側地区とははっきりと区別されていたからである。その一方でこの作品の子どもはベルリンの中心部にも東側地区にも移動する。シュプレー川を越えて警察本部を訪れた直後、中心部の新聞社街にも顔を出すのである。つまりケストナーは地方出身の子どもを主人公に据え、彼にベルリン各地を移動させることで(地方在住の)読者にもベルリン移動を体験させるのだが、主人公をあくまでベルリンに同化させず、最終的にドレスデンに帰すことで、この作品のベルリン描写にはどこか観光者然とした、冷めた視点が保持されている。

(2) ドゥリアン『木箱から現れたカイ』(1926)の子どももまた、ケストナーの人物同様、おもにベルリン西部を地下鉄・路面電車・バス・タクシーで移動し大人たちと交渉する。ただし彼らがケストナーの作中人物と決定的に違うのは、それらの移動手段に無賃乗車する点にある。ドゥリアンの描くベルリン在住の子どもは総じて貧しく、学校に行かず(行けず)昼間は働いている。とくに表題主人公(カイ)は両親ともいない孤児に設定されている。加えてカイたちの活動拠点が旧北駅、シュプレー川を越えた北部の労働者街にあることも注目に値しよう。下層階級の住む地区から新興のベルリン西部に進出するこの作品の子どもの移動は、実際の移動距離を測ってみても心理的な隔たりとしても『エーミール』のそれよりはるかに大きい。しかし彼らの内面が描写されることは極端に少なく、そういった点で『カイ』はドイツ児童文学史上、初めて新即物主義の手法を取り入れた作品とされている。しかし同時代の大人の文学に顕著な新即物主義とは、少なからず様相を異にする(それについては後述する)。

(3) ウェディング『エデとウンク』(1931)の表題主人公(エデ)もまた、ドゥリアンの人物同様、ベルリン北部の労働者街から移動する。彼の行き先は西部ではなくより北部の、より貧しい地区に向かう。その際の交通手段はもっぱら自転車で、失業中の父に代わって家計を助けるべく、新聞配達に従事する。それでも小銭しか稼げない本作の子ども達の経済状況は、連続強盗犯を捕まえて多額の懸賞金を手にするエーミールや、米ドルの一攫千金を夢見たのち、それを実現させてしまうドゥリアン描くカイの空想的非現実的なそれとは一線を画する。また、エデは当時の児童文学の主人公にしては珍しく両親と暮らしているが、彼はより北に移動することで、自分よりさらに貧しい子ども、少数民族のジブシー(ウンク)と知り合う。そして幌馬車で暮らすジブシー一家の劣悪な生活環境を目の当たりにする一方、エデは友人一家を通じて共産主義にも目覚める。その点でウェディングとドゥリアンの描く子どもは、同じ社会階層にあってもその後の展開はまったく異なっている。当時のすべての子どもが西ベルリンに足を延ばすことができたわけではなく、貧しい北ベルリンを離れることができなかった子らもいたという事実を書き残した点で、左翼系出版社から刊行されたベルリン児童文学にも歴史的意義は認められる。

(4) 両大戦間期ベルリンの少女の移動については、エルフケン『ニッケルマンのベルリン体験』(1931)を手がかりに考察した。表題主人公のニッケルマンもまた、第一次世界大戦で父を亡くし母子家庭で育っている。彼女が女友達とふたり路面電車に乗って出かけるのは、やはりベルリン西部である。ただ

しエーメールやカイら少年の移動は集団で行われたのに対し、ニッケルマンら少女はごく少人数で移動する。その行き先が新築の高級デパートであることも少女特有の現象と言えよう。路面電車での移動中、少女らは亡命ロシア人の居住地区を通過する。あるいはデパートでのバーゲンの最中、万引きする婦人が逮捕される瞬間に遭遇する。少女の移動は少年のように屋外を大胆に走り回ることではないが、路面電車の車内やデパートといった屋内にあっても、親の目の届く小さな空間に閉じ込められる(閉じ込められる)のではなく、大人に混じり群衆となつて都会を闊歩する彼女たちの姿は、両大戦間期ベルリンを移動する新しい子ども像の一典型と考えられる。

このように交通網の整備された両大戦間期ベルリンを移動する子どもの足跡を追いかけることで、彼らを取り巻く大都市ベルリンのさまざまな社会問題が浮かび上がってくるのがわかった。さらに本研究を通じて研究代表者は、当時の子どもにとって新聞または電話というメディアがいかに身近なものであったかという事実を突き止めるに至った。以下ではこれら移動せずとも情報を獲得できる手段(新聞)および移動せずとも情報を伝達できる手段(電話)と子どもの関係について、研究成果の概略を述べる。

(1) 上述の通りケストナーの『エーメール』では、表題主人公が新聞社を訪問する場面が描かれており、そこにケストナーと名乗る新聞記者が登場する。また、主人公は偶然にも連続強盗犯を捕まえたことで大々的に紙面を飾ることになる。新聞(社)に対するメタ的な扱いや子どもと新聞の非現実的あるいは理想主義的な関係の描写は、いかにもケストナーらしい手法と言える。エルフケンの『ニッケルマン』においてもまた、少女が新聞紙面を飾る場面がある。ただしこちらは社会面の記事としてではなく、新聞社主催の仮装パーティに出場して優勝したからである。また、『ニッケルマン』では少女らが新聞の見出しを想像する場面が頻出する。実際に彼女たちが新聞を読む場面はないものの、路上販売される大衆扇動的な昼刊および夕刊新聞への言及から、彼女たちにとって新聞が身近にあったことはじゅうぶんうかがい知れる。ドゥリアンの『カイ』では新聞の広告欄に焦点が当てられている。アメリカのチョコレート会社社長が掲載した広告を目にすることで、カイは広告業界に足を踏み入れることになる。貧しい労働者街が舞台のウェディングの『エデとウंक』における子どもと新聞の位置付けは、他の諸作品とは大きく異なっている。エデにとって新聞は配達して生活費を稼ぐ手段であると同時に、共産主義に近づく重要な情報源でもある。さらにこの作品では新聞集配所で仕事を取り合う北ベルリンの貧しい子どもらの姿も詳述されている。

1929年のベルリンでは1年間に45の朝刊新聞、2つの昼刊新聞、14の夕刊新聞が発行されていたと言われているが、新聞をめぐる子どものあり方からもまた、両大戦間期ベルリン児童文学の多様性を読み取ることができた。

(2) ドレスデン出身のエーメールがベルリンで出会う子どもらのうち、12人が自宅に電話を有しているエピソードは、この時代の子どもと電話の関係を考える上で見逃せない。彼らは実際にベルリン市内を移動して窃盗犯を追跡する一方、電話番の少年を据えることで犯人逮捕のための情報網を張り巡らせる。『カイ』にもまた表題主人公が電話をかける場面が登場する。もっとも彼の自宅には電話はないので、街角の商店で電話を借りるしかない。そして印刷屋に電話し、商売敵の広告印刷をキャンセルすることで、競争相手を出し抜こうとする。エデもまた街角から電話をかけるが、彼はカイと違い公衆電話を利用する。エデが電話する相手は共産主義者の友人の父であり、受話器を置くや否や、警察に追われる彼をかくまうべく、自転車で奔走する。こういった経験を通じてエデは思想的・心理的に実の父親の庇護下を離れ、独自のルートで大人社会に参入しようとする。その際、エデにとって友人の父が新しい精神的な父親の役割を担っている。これら少年たちとは異なり、ニッケルマンが電話をかける描写がないのは、彼女が新聞を読まないのと同様、この時代の少年と少女では新しい情報通信手段に対するアクセスの回路が違っていた事実を示している。エルフケンの作中、電話をかけるのはもっぱらニッケルマンの母親である。しかもその話し相手は同じアパートの住人であったり、同じ職場の別の部局の同僚であったりと、電話は必ずしも遠距離をつなぐメディアとして機能していない。とはいえいずれの通話においても話題にされるのは、虐待が原因でベルリン郊外の児童福祉施設を脱走してきた少年であり、『ニッケルマン』の終盤はこの少年を中心に物語を展開させることで、『エデ』にも通じる社会批判性を帯びている。ただしその際、ニッケルマンら子ども(少女)たちは蚊帳の外に置かれている。こういった比較から、同時代に活躍したふたりの女流作家、エルフケンとウェディングの間には、子ども(少女)を大人の問題にどれだけ関与させるかという点で見解の相違があったことが認識できる。

以上のような研究成果を踏まえ、本研究では両大戦間期ベルリン児童文学の独自性、それまでのドイツ語圏の児童文学や同時代の大人の文学とは一線を画する歴史的意義についてもまとめた。

それはケストナー世代の作家の描く子どもは誰ひとりとして大都会ベルリンを恐れていないということに集約されよう。新即物

主義に代表されるこの時代の大人の文学の主人公は大都市で疎外され、自己を見失うのに対し、子どもたちは仲間を見つけ、彼らと連帯し、友情を確認するに至る。子どもたちはベルリンを移動するだけでなく、電話を利用し、新聞にも目を通しながら、積極的に他者とつながろうとする。そうすることでそれぞれが親元、あるいは狭い家族関係から独立し、新しい人間関係を築き上げていくのである。1925年時点のドイツで田舎に暮らす人は全人口の3分の1、もう3分の1は中小都市に、残りの3分の1は大都市に暮らしていたと言われている。こういった時代、エキゾチックな異世界や自然豊かな山村、田舎を舞台にした児童文学は魅力を失っていった。それに代わり当時の子どもにとってリアルな世界、自分たちのすぐ身近なところで起こりうる物語が台頭し始めた。つまりより多くの子どもが共感を持って、自然に受け入れられる作品として、大都市を舞台にした児童文学は書かれ始めたのである。その際に本研究で取り上げられたベルリン児童文学は、大人よりも子どもの方が都会で生きることに対し柔軟で開放的で強い意志を持って臨んでいる、というメッセージを発した。現実には都会で暮らす子どもの中には、父親不在の家庭で経済的苦境にあえぐ子どもも多かったはずである。しかしそんな彼らに向けて新しい理想像、20世紀の都市型のライフスタイルに合わせた新しい子ども像を提示したところに、両大戦間期ベルリンを舞台にした児童文学の歴史的意義が見出される。

最後にこれらの研究成果を発展させ、今後のさらなる研究に結び付ける展望について簡単に述べたい。本研究でも触れた通り、両大戦間期ドイツ児童文学の特徴のひとつに父親不在または母子家庭という子どもの生育環境が挙げられる。そして父親に代わる成人男子、いわゆる「おじさん」的存在が子どもの成長に何らかの影響を与えるのも、多くの作品に共通して見られる現象である。本研究の研究代表者は「おじさんと甥・姪関係」を父子関係の変種として理解している。そして今後は帝政期から現代まで、20世紀ドイツ児童文学における「おじさん」表象の変遷を解析することで、児童文学は旧来の家父長制に代わる多様な家族のあり方を提示するメディアとして機能し得るのかという、この文学ジャンルの今日的役割の検証と再定義に取り組む予定である。なお、この新たな研究課題は平成30年度に基盤研究(C)として科研費の採択を受けている(課題番号18K00446)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

佐藤 文彦、父殺しとおじさんの交換 —ア

レックス・ウェディング『エデとウンク』(1931)におけるエデの成長について一、金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇、査読無、8巻、2016年、29-43頁
<http://hdl.handle.net/2297/47498>

[学会発表](計2件)

佐藤 文彦、両大戦間期ベルリン児童文学に描かれた移動する子どもたち、大阪市立大学ドイツ文学会第59回研究発表会、2018年

佐藤 文彦、両大戦間期ベルリンの移動する子どもたち、日本独文学会北陸支部2017年度研究発表会、2017年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 文彦 (SATO, Fumihiko)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：30452098